

東京大学史料編纂所では東アジア等における史料収集事業の一環として、ロシア連邦における日本関係史料の調査をすすめている。

二〇〇五年三月十日、サンクトペテルブルグ市からロシア国立海軍文書館ウラジミル・ソボレフ館長、ロシア国立歴史文書館アレクサンドル・ソコロフ館長らを招き、日露関係史料をめぐる国際研究集会を開催した。四回目となった今回の研究集会は、日本学士院（共催）の日本関係在外未刊行史料調査事業の一環として行なわれ、外務省からも日露修好一五〇周年記念事業の認定をうけた。

研究集会では、宣教師ニコライ研究者である大妻女子大学中村健之介教授、そして歴史文書館ソコロフ館長から、ニコライ大主教（一八三六～一九二二）とその関係史料に関する報告があった。海軍文書館ソボレフ館長は、ロシアによる日本近海測量や海図作成の歴史を報告し、いずれも参加者との活発な質疑応答があった。以下にこの三報告を収録する。

なお、中村教授は当日配布したニコライに関する資料をもとに報告を補足されたが、誌面の関係から、ここでは事前にいただいた報告原稿を掲載するにとどめる。

研究会の当日は、ダニイル府主教ら日本ハリストス正教会の司祭数人も駆けつけて熱心に耳を傾け、報告終了後、持参したニコライ手帳の写真数葉がソコロフ館長から府主教へ献呈される一幕もあった。

最後に、本研究集会の実施にもサンクトペテルブルグ国立大学ワジム・クリモフ教授から多大なるご尽力をたまわったことを付記して謝辞にかえたい。

（東アジアWG／保谷記）

宣教師ニコライの周辺

中村 健之介

ロシア正教会宣教師ニコライ（一八三六～一九二二）の日記には、ざっと数えて五〇〇人近い人物が登場する。その中からいま二人のロシア人と二人の日本人を紹介してみる。

（一）アントニー（フラボヴィツキー Храновичкий）とセルギイ（ストラゴツキー Стратогский）

ロシア帰国中のニコライのペテルブルグでの日記にこんな記事がある。「イサク大聖堂は、おそらく一〇〇〇人を超える参拝者がいただろうが、それでも中は閑散とした感じだった。〔……〕実業中学の生徒た

ち、リョーリヤ〔アレクセイの愛称〕・フラポヴィツキー、ネフェーヂエフ、ドミートリエフの三人が、反対側にいたのに、祝福を受けるためにこちら側へ来た。リョーリヤが、この徹夜禱が終わったら家へ寄ってくださいと言った。〔……〕

フラポヴィツキーの家に長居をして夜中の一二時半になってしまった。実に暖かい家庭だ。母親が賢い。それに彼女はいつも果実酒でもてなしてくれる。父親は気性が若いし、一六歳のリョーリヤの語る自由主義的な宗教的な話や関心の対象に、心から耳をかたむけ笑顔でうなずいている。リョーリヤは芯からのロシア青年だ。若々しいし、かわいいし、頭もいいし、しかも謙遜だ。中学で一番だということが話題になったときリョーリヤは、『魚がいなきヤザリガニも魚』と言った〔ニコライの日記、一八七九、一一、二四、サンクト・ペテルブルグ〕

「イシドル府主教さまと宗務院の全員はモレーベンのため冬宮へ行かれたので、イサク大聖堂の聖体礼儀は、両副主教と、いまここにいる掌院全員（全部で一四名）、そしてイサク大聖堂の長司祭によって執り行なわれた。

わたしは筆頭の掌院として立った。わたしが聖体礼儀の開始の祝福をなすべく急いで至聖所へ入ろうとすると、フラポヴィツキーが例のデリケートなほとんど聞こえないような声で『ニコライさま、ごゆるりと』と言った。イサク大聖堂の儀式は細かい点もすっかり呑み込んでいるので新米には教えることができるのですよ、という感じを出していた。〔……〕

権杖持ちを勤めたフラポヴィツキーの祈りに感動した。権杖持ちが心をこめて祈っているのは、初めて見た〔一八八〇、二、一九、サンクト・ペテルブルグ〕

ここに登場した一六歳の実業中学生アレクセイ（リョーリヤ）・フラポヴィツキー（一八六三〜一九三六）は、この後もニコライのロシアでの日記に何度か登場し（八〇・三・二、八〇・三・二一など）、その都度私たち読者に鮮かな印象を与える。ニコライもこの中学生の優れた宗教的資質を感じとっている。

フラポヴィツキー家は聖職者の家ではない。もとはノヴゴロド県の貴族である。アレクセイは、ニコライの日記からわかるように神学校ではなく実業中学で学んでいる。

ところがアレクセイ・フラポヴィツキーは実業中学（*Реальная гимназия*）を卒業すると、ペテルブルグ神学大学へ進んだ。ロシアの神学大学生は多くが聖職者の子弟であり、神学校（セミナリヤ）から上がってくる。実業中学から神学大学へという進路選択は、まれであった。もちろんそれはアレクセイ自身の資質がうながした選択であっただろうが、「日本のニコライ Николая Рюрикши」との出会いがアレクセイの背を押していなかったとは言えない。

そしてアレクセイ・フラポヴィツキーは、神学大学卒業（一八八五年）と同時に修道士となる決意をし、叙聖されて修道司祭アントニイとなった。

アントニイは信仰篤く、かつ優秀であった。かれはドストエフスキーを愛読し、またスラヴ派の研究を続け、ロシアにおいては信仰と哲学は密に接しており、しばしば一体化していると考えるようになる。かれは、一八八八年、「意志の自由と倫理的責任のための心理学的基盤」〔*Канонические данные в пользу свободы воли и нравственной ответственности*〕という論文によって神学修士号（*Магистр*）を与えられた。

アントニイは短期間の間に、モスクワおよびカザンの神学大学で教鞭をとり、ペテルブルグ神学大学でも舎監 инспекторをつとめ、カザ

ン神学大学学長になる。一八九七年、三三歳で、主教に昇叙。一九〇六年には大主教となる。ヒエラルキーを足早に登っていったのである。

いくつかのロシアの神学事典やアメリカの百科事典によれば、アントニイはロシア正教会の若いリーダーとして、教会改革者として、また神学者としても、人々の信望をあつめていた。若い聖職者たちはアントニイの著作を熱心に読んだ。かれの感化を受けて多くの若者が「ニヒリスト(旧制度否定主義者、革命志向者)」たちに対抗し、苦しむ人々と教会のために働こうと修道士になった。一八九〇年(明治二十三年)から約六年間、日本の神学校からキエフの神学大学に留学したイオアン・瀬沼(河本)恪三郎も、当時のロシアでのアントニイ師の名声を聞き知っており、帰国後に日本正教会の神学校校長になると「アントニイ・フラボヴィツキーはわたしの理想です Он мой идеал」などと言っている。ニコライは「アントニイ・フラボヴィツキー師はあまりに底深くかつ多面的な人格であり、かれのまねをすることはむづかしい。あのような人物は、ロシアでも、かれ以外にはいないかもしれない。О. Антоний Храповицкий слишком гибок и многогранен, чтобы следовать ему. Таких, как он, может быть, и в России еще нет.」と書いている(ニコライの日記、一八九六・六・一七/二九)。

アントニイは、社会のなかに「神の王国」を築くためには、教会は国家への依存を離れなければならないという考えであったという。とはいふものの、かれは、政治的見解においては常にゆるぎない専制君主支持者ではあった。

アントニイは日本のニコライと長く文通を続け、日本宣教団を支援した。日本でのニコライの日記にもアントニイ・フラボヴィツキーの名は数十回も出てくる。

若いアントニイ・フラボヴィツキーがペテルブルグ神学大学の舎監をしていたとき、そこにイワン・ストラゴロツキー(一八六七―一九四四)という神学大学生がいた。ニージニー・ノヴゴロドの南、アルザマス(Арзамас)の修道院付属の教会で働く妻帯司祭の子である。イワン・ストラゴロツキーは一九九〇年一月にペテルブルグ神学大学を卒業し、五月に修道司祭となり、セルギイという聖名を授けられた。

学生時代のセルギイ(イワン・ストラゴロツキー)は、四歳年上の若い舎監・修道司祭アントニイ(フラボヴィツキー)が「日本のニコライ」について敬愛をこめて語るのを聞いていた。セルギイは、尊敬するアントニイがまるで自分の師のように語る「日本のニコライ」に会いたいと思った。一九九〇年一二月、修道司祭セルギイ・ストラゴロツキーは来日し、九三年五月まで、日本のニコライの下で宣教師として働いた。

そして四年半後、掌院になったセルギイは九七年一二月二六日/一八九八年一月七日、修道司祭アンドロニクと共に再度来日し、ニコライの下で働いた。

一八九八年八月、セルギイはニコライと共に北海道の諸教会、さらにシコタン島の教会を巡回する。その旅については、別に配布のコピー



アントニイ(フラボヴィツキー)

中村の「宣教師ニコライの明治三二年夏北海道巡回日記」(上、中、下)を参照されたい。この旅のセルギイが書いた記録が『日本巡回(То Япония)』(宮田洋子訳『北海道巡回記』)である。

セルギイは一八九九年一月二七日/二月八日にロシアへ帰国するが、その後もニコライの日記には長い年月にわたって、アントニー(フラボヴィツキー)とセルギイ(ストラゴロツキー)の名が並んでくりかえし出てくる。ニコライの日記にはいつも、セルギイはアントニーを敬愛していると書かれている。「セルギイは先生であるアントニー主教に、まるで僕のように信服しきつてゐる。Рассказъ поклопникъ своего учителя епископа Антония Храповицкого」(日記一八九八・一二・一一/二二)。

それが当時の両者の関係であつたようである。日本正教会の図書館建設は、セルギイの要請を受けてアントニーがロシアで資金を集めて実現したのだつた(日記一八九五・七・一九/三二)。

ロシアへ帰つたセルギイ・ストラゴロツキーもまた、ロシア正教会のヒエラルキーの階段を上へ昇つていった。一九〇一年にはセルギイはペテルブルグ神学大学学長の地位に昇り、一九〇五年にはフィンランド大主教、一九一七年からはヴラヂーミルの府主教となる。

一九一七年二月、ニコライⅡ世は退位し、帝政は終わる。臨時政府の下で宗務院はそれまでの議員たちを解任したが、なぜかセルギイだけは解任されなかつた。それまでの宗務院は、俗人である宗務院総監(ообщеправитель)の下に一人の聖職者を主とする議員がいたのだが、一七年の総主教制度の復活によって、宗務院総監が廃され、新しくできた宗務院は総主教の下におかれた。セルギイはその新しい宗務院にも加わつた。かれはすでにロシア国内の教会政治の中心部に入つていたのである。

一方、アントニー・フラボヴィツキーもまた、革命期のロシア正教会

およびその後の在外ロシア正教会(The Russian Orthodox Church in exile)においてきわめて重要な働きをする。

二〇世紀初頭、ロシアの革命と内戦の時代、アントニーはハリコフ大主教、そしてキエフ府主教であつた。

アントニーは自分の考える教会改革案を、一九一七年から一八年にかけてのロシア正教会公会(「地方公会 помещенный совет」という)に提出した。この公会は、右に書いたように、ピョートル一世以来廃止されてきた総主教制を復活させた画期的公会であつた。アントニーは、教会は総主教と主教会議を上に乗せてその指導のもとに運営されるべきだと主張した。その構想は公会に出席していた多くの主教たちから歓迎された。

主教会議はアントニーを総主教に選出するのようには見えた。第一回の投票(無記名)において三人の最終的総主教候補者が選ばれたが、その三人のうちでアントニーがもっとも得票数が多かつた。しかし、最後のくじ引きによる決定において選ばれたのは、ティホン(ベラーヴィン)だつた。

このモスクワでのロシア正教会「地方公会」に日本正教会から派遣されて参加した司祭三井道郎は、その目で見た一九一七年一月一八日の、救世主ハリストス教会における総主教選出の瞬間をこう書いている。

「陰徳を以て世に名高き修道司祭七十有余歳のアレキセイ翁に祝福を与えくじを抽かしむ。アレキセイ老修士、ウラジミル府主教の祝福を受け三度十字架を画し函中より一のくじ紙を取り出して之を府主教ウラジミルに渡す。ウラジミル師はそのくじ紙を開き、六名の公会議員に示しつづ『モスクワ府主教ティーホン』と声高に叫ぶ」(三井道郎『回顧断片』)。

第一次世界大戦時からロシア革命期にかけて、ウクライナはドイツ軍、

ウクライナ国民軍(ペトリユラ Симон Петлюраが率いる)、帝政派(白衛軍)、ポーランド軍、さらにマフノの農民軍も加わった戦闘が展開され、支配者がめまぐるしく交替した。政治的にも宗教的にも混乱が続いた。帝政を守ろうとする白軍とポリシェヴィキの赤軍の激戦もあった(M・ブルガーコフ『白衛軍 Белая гвардия』参照)。キエフ府主教アントニイは、教会の、政府からの独立を唱えながら一貫して帝政支持者であった。かれは敗者となる白軍側を支持した。しかしデニーキン將軍の率いる白軍は敗れた。そしてペトリユラ政権に逮捕されポーランド軍に捕虜として引き渡された。(その七ヶ月以上の拘留の間にアントニイは若いときから愛読してきたドストエフスキーについて小さな本を書いた。『ドストエフスキー作品事典 Словарь к творениям Достоевского』である。ドストエフスキーが『悪鬼ともBeck』や『作家の日記 Дневник писателя』で予言したおそるべき邪悪な人々の跋扈が、いま現実となった、とアントニイは書いている。)

一九一九年末、アントニイはロシアを出た。かれは最初コンスタンチノープルに、次いでユーゴスラヴィアのスレムスキ・カルロフツィ(Сремские Карловци、ベオグラードの北西七〇キロメートル)に移った。

一九二〇年、アントニイは、ロシアを去って外国へ出た主教たちの間で上位に立つ者であり信望も篤かったことから、かれが主になって、ロシア正教会宗務院(Архиепископский Синод)を設立した。翌年かれはカルロフツィに主教会議(Русский Везаграничный Собор)を開催した。

この会議は、新しく設立された宗務院がロシアの外へ出た教会の最高統率機関(Высшее церковное управление за границей)であることを宣言した。またその会議は、われわれはロシアにおいて帝政が再興されることを望むと宣言した。そして、アントニイを「全ロシアの総主教の副代理(Vice Regent)」とした。この新しい組織は総主教ティホンに対し

て無条件に従うことを表明したが、その総主教ティホンがロシアの共産政権の利益を図るような行動をとっていることに危惧をいだくようになった。

総主教ティホンは一九二五年に世を去った。その二年後、アントニイはモスクワの総主教庁との関係を絶ち、ユーゴスラヴィアのかれらの宗務院に属す教会こそがロシアの歴史的正教会を継ぐ唯一の正統な教会であると宣言した。かれを支持する人々は、ロシアを出た正教徒全体に対する管理統率権を有すると宣言したこの完全自治教会の総主教としてアントニイが選ばれることを期待した。アントニイはそれにはならなかったが、かれは在外ロシア正教徒の実質的指導者であった。一九二〇年代、共産主義政権のロシアを逃れた亡命者の全体は三〇〇万人から四〇〇万人と言われる。その大半がロシア正教徒(the Russian diaspora)であった。西欧諸国へ逃れたロシア正教徒は約二〇〇万人であったと推定されている(《Православная Энциклопедия》 под ред. Алексия II, стр.170)。かれらの信仰を支え束ねる任務をアントニイは負ったのである。

しかし右のアントニイの宣言は、同じく西側へ逃れた高位聖職者の一人人府主教エヴロギイ(Евлогий、ゲオルギエフスキー)との関係に亀裂をもたらした。モスクワの総主教ティホンは、府主教エヴロギイを西ヨーロッパのロシア正教会管区の代表として認めていたのだった。後にモスクワと決裂しエヴロギイは、一九三二年、コンスタンチノープルの総主教フォティイ二世(Константинопольский Патриарх Фотий II)に訴え、フォティイ二世はコンスタンチノープル総主教の管轄下において、エヴロギイに西ヨーロッパのロシア正教会の総主教代理の地位を認めた。そこにはモスクワとコンスタンチノープルの権威の競争が感じられる。西欧諸国の大半の正教区は、モスクワと決裂したエヴロギイを支持した。モスクワとの紐帯を維持すべしとしたのは、ロスキー B. H. Лосский、

ベルチャーエフエムA. Bepraeaen などである。宗教世界の政治は世俗世界の政治以上に複雑なのである。

日本の正教会との関係で見落としてはならないのは、このアントニイたちのユトゴスラヴィアのカルロフツィの宗務院には、はじめのうちには、バルカン諸国、ドイツなどとならんで、極東の正教会も属していたことである。

ロシアでは、テイホン、ペトルの後、モスクワ府主教セルギイ（ストラゴツキー）が、ロシアの正教会の最高指導者となった（一九三六年から総主教代行代理）。かれはスターリンの下でロシア正教会を生き長らえさせねばならなかったのである。セルギイは最晩年一九四三年八月には、ロシア正教会総主教に選ばれた。（前記の「宣教師ニコライの明治三一年夏」に書いたように、一九四三年九月四日、セルギイはスターリンに招かれクレムリンに行った。そこでかれは、公会の召集、神学教育の再開をスターリンに願ひ出た。）

若いときに「日本のニコライ」に連なっていた二人の聖職者、アントニイ（フラポヴィツキー）とその弟子だったセルギイ（ストラゴツキー）が、前者はロシアの外で、後者はロシアの内、ソ連時代のロシア正教徒を率いるリーダーとなったのである。

モスクワのセルギイは、一九二七年七月、在外（Зарпаниччи, outside Russia）ロシア正教聖職者たちに対し、ソヴェト権力に対して敵対的と解釈されかねない行動を決してとらないという誓約書をモスクワ総主教庁に提出するよう要求した。セルギイは総主教ティホンの下にあつたときも、ソ連政権寄りの姿勢を見せたことがあつた。かれはロシア内で教会を守る任務を負つた者であり、政権との妥協以外に国内正教会を生き延びさせる道はなかつた。



明治30年、北海道を巡回した掌院
セルギイ（ストラゴツキー）

ニコライは若いときの、修道司祭として掌院であつたセルギイと日本で一緒に仕事をしてみても、セルギイが対人関係において実に温厚な忍耐力のある聖職者であることを認め、かれが日本に残つて働いてくれることを願つた。その願ひがつよかつたからなのだろう、セルギイがロシアへ帰ることに決したとき、ニコライは、セルギイのそのおだやかさがいいわば「よい子」の愛想のよさであることを感じ、セルギイは実は悪意のないヤヌスではないか、という疑いを抱いたようである。たとえば、セルギイがロシアへ帰る日の日記に、ニコライはこう書いている。

「四時に、セルギイ神父はわたしの部屋でお茶を飲み、そのあと一時間ほど二人で話した。わたしたちは友人として別れるだろう。わたしたちは一度も言い争ひをしたことがなかつた。わたしはかれが腹を立てたのを一度も見ることがない。かれはわたしにも、他のだれかにも、乱暴な口をきいたこともない。こんな人物には生れて初めて出会つた。〔……〕かくして、*finis la Comedia*（喜劇はおわつた！）神のご意志の埒の内にはないものは、すべて喜劇ではないだろうか？ たいそう愛想がよくていらつしやるセルギイ・ストラゴツキー神父の二度の

来日と離日は、外面的な動機（「アジア旅行記を書こうとして来日したこと」と結びついた、かれの心の善さと意志の弱さの結果である」（日記一八九九・二・二一―四））

在外ロシア正教聖職者の多くはセルギイ（ストラゴツキー）の誓約書提出の要求を拒否したが、ニコライ永眠後日本正教会の長となった主教セルギイ（チホミロフ）をはじめ数人は、それを受諾し誓約書に署名した。カムチャツカの主教ネストル（アニーシモフ）もモスクワを支持した。ネストルは当時ハルビンの分院も統括していた。

アントニイたち、ユーゴスラヴィアのカロフツィの教会指導者たちは、形式的にはエヴロギイと和解したが、「エヴロギイはギリシヤ人（コンスタンチノープル総主教派）に内通した」という不信は残った。

セルビア正教会総主教ワルナワ（Сербскиѣ Цариградъ Варава）の調停と指導によって、在外正教会は一九三五年の公会においてバルカン、西ヨーロッパ、北米、極東の自治管区を承認した。バルカンは大主教アナスタシイ（グリバノフスキー「Грибановский」）間もなく府主教となる）、西ヨーロッパは府主教エヴロギイ、北米は府主教フェオフィル、極東はハルビンの府主教メレティイ（Харбинский митр. Меертиѣ）がそれぞれ長となった。

府主教アントニイは一九三六年八月一〇日、永眠した。かれの後は、アナスタシイ府主教（グリバノフスキー）が、在外ロシア正教会全体のリーダーとなった。イオアン小野帰一の日本人初の主教叙聖は、このアナスタシイの指示のもとで、メレティイ以下五人の主教によって、一九四一年（昭和一六年）四月、ハルビンのニコライ大聖堂で執り行なわれたのである。

もう一度アントニイ府主教（アレクセイ・フラポヴィツキー）と日本のニコライの關係に目を向けたい。最初に紹介したように、一時帰国していたニコライはペテルブルグのアリョーシヤ・フラポヴィツキー少年の両親の家に招かれたことを日記に書いている。ニコライだけでなくペテルブルグの聖職者たちはときどきフラポヴィツキーの家を訪れることがあった。日本の宣教師で働いている修道司祭ヴラヂミル（ソコロフスキー）も招かれたことがある。アリョーシヤ・フラポヴィツキーは将来日本宣教師で働きたいと日本語を学びはじめたほどだった。修道司祭アントニイとなったアリョーシヤは、結局は日本へ来なかつたのだが、しかし、前にニコライの日記によって紹介したように日本宣教師を支援し、その關係は後々まで続いたのだった。

六五歳をすぎたからだだが、アントニイはニコライをはじめとする日本正教会関係者たちのことを思い出して、次のように書いている。

「一年後（一八七九年）、幸運にもわたしはペテルブルグで日本宣教師長ニコライ大主教と知り合った。ニコライ師は主教昇叙を受けるためにペテルブルグへ来られたのだった。わたしは最初、日本宣教師に領聖の聖器具を贈るための寄付に中学生としてわずかばかりのお金を差し出した。それから立派な主の寝りの聖像のためにも寄付した。

それから、洗礼を受けて正教徒となった日本人が何人かペテルブルグにやってくるようになった。最初に来たのはアレクサンドル松井（「寿郎」）である。かれはペテルブルグのきびしい気候のために病にかかりペテルブルグで亡くなった。日本語の碑銘が刻まれたアレクサンドル松井の小さな墓がその後長く、アレクサンドル・ネフスキー修道院の墓地にあった。

ペテルブルグ神学大学のアレクサンドル松井の後輩にあたるのが、

アルセニイ岩沢〔丙吉〕である。岩沢は立派に神学大学を卒業した。記憶にまちがいがなければ一八八八年だったと思う。かれは現在も元気でいるかもしれない。

カザン神学大学に留学した日本人バンテレイモン佐藤〔叔治〕も見事に神学士の学位を得た。キエフ神学大学に留学した三井〔道郎〕も同様であった。もう一人ロシアで神学教育を受けて他の日本人留学生たちより成績優秀な者がいたが、名前は忘れてしまった。かれはモスクワ神学大学の神学士号を一八九二年に得た〔ペトル石亀一郎〕。

ペテルブルグ神学大学で神学教育の全課程を終えた者としては、その後に来た若い日本人学生たち、セルゲイ庄司〔鐘五郎〕、河本〔イオアン瀬沼恪三郎のこと。キエフ神学大学卒〕、そして樋口〔イエメリアン樋口艶之助〕がいる。セルゲイ庄司の洗礼のときは、わが国の有名な教育家S・A・ラチンスキーが代父となった。ラチンスキーは信仰心の篤い学者で、モスクワ大学教授の職を捨ててその後三〇年近くも故郷スモレンスク県のタテヴォ村で農民のための教師として地味な活動を続けた人である。

一八七〇年代には日本の新しい正教信徒の数は七〇〇〇人くらいだったが、それが大主教ニコライのはたらきによって三万人にまでふえた。ニコライ大主教は五〇年間も日本で活動し、宣教活動と学者としての仕事によってその名声は全世界に知れ渡っていた。

忘れずに言っておきたいのは、ロシアへ来た若い日本人のキリスト教育のために、ペテルブルグのノヴォデーヴィチ女子修道院の修道女たちも彼女たちなりの協力をしていたということである。ノヴォデーヴィチの修道女たちは一人の若く賢い日本人女性画家〔山下りんのこと〕に洗礼を授けた。この日本人女性画家はノヴォデー

ヴィチ女子修道院に入り、絵画制作の修業をして大いなる進歩を遂げたのである。いま彼女がどうしているか、生きているか、もう亡くなったか、わたしは知らない。ただ、前に書いた自分の少年時代からすでに、日本は（当時日本はまだ昔ながらの家父長的な国であったのだが）、さまざまな芸術分野において輝かしい才能の持ち主たちが輩出していたということを覚えている。（主教ニコン（ルクリツキー）著『キエフとガリツィヤの府主教・福者アントニイの伝記』NY, 1956）

山下りんはその「滞露日記」一八八二年三月二日に「此夕ノ祈リニ、マチャアレキセイ〔アレクサンドラ？〕ノ読経ヲ聞。大ニ美ニシ、我モ祈読度思ウナリ」と書いている。この後、彼女はノヴォデーヴィチ女子修道院で、フェオファニア尼、アポロニヤ尼の指導のもとで、アントニイの回想にあるように、信仰を学びなおしたというようなことがあったのかもしれない。

二）万里小路秀麿

ロシアへ帰国したニコライは、ペテルブルグではアレクサンドル・ネフスキー大修道院に宿舍を与えられている。そこへ万里小路秀麿という日本人が訪ねてきた。

「日本人学生が来た。軍事地勢学を学んでいるマデノコオジという。初めて会った。どうやらまじめな青年のようだ。Пришел потом японский студент, изучающий военную топографию, князь Мадено-коодзи, видный много теперь в первый раз. По-видимому, первый молодой человек」(ニコライ日記一八八〇・二一・七)

手塚晃編『幕末明治海外渡航者総覧』第二巻によれば、万里小路秀麿は一八五八年一月一六日、京都生れ。名は正秀とも。一八七一年四月、

外務省・文部省派遣の「学生」としてロシアへ渡る。公費留学。帰国して「式部寮御用掛」となる。一九一四年(大正三年)六月一日、没。

宮地正人監修『国際人事典』(毎日コミュニケーションズ、一九九一年)には、明治八年(一八七五年)五月二三日付け『東京曙新聞』の、万里小路秀麿の熱心な勉学ぶりを伝える在ロシア公使榎本武揚の手紙が紹介されている。「同子は頗る好く魯語を了解しすらすと通弁も出来、方今は町住居にて師匠を家に招き一日に二時間世界歴史点竄(代教)究理化学等の如き中学校生徒の学科を」学んでいるとある。

そして明治一五年(一八八二年)五月四日の『東京横浜毎日新聞』に「華族正三位万里小路博房君の弟秀丸(ママ)君は予て露国に留学中の処ろ一日帰朝せられたり」という記事が載っている。

同年一〇月一三日の「絵人自由新聞」には、秀麿が「露国セント・ペテルブルグ府の士族陸軍大佐ニコライ・バユノフ氏の妹マリヤ・バユノフ女と結婚致し度旨その筋へ願ひ出られし」と報じられている。後で紹介するニコライの日記から推測するに、秀麿はそのマリヤ・バユノワとは、結婚しなかつたかもしれない。

V. S. ペロネンコ編の論文集『一九世紀〜二〇世紀、宗教・文化・政治面におけるロシアと日本の相互関係の歴史』(《Из истории религиозных, культурных и политических взаимоотношений России и Японии в XIX—XX веках》 под ред. В. С. Белоненко, Санкт-Петербург, 1998.)に、S. G. ジェマイティス(S. Г. Жемайтис)による資料紹介「明治期の正教徒の公家。セルゲイ・アレクサンドロヴィチ・万里小路の伝記について」(Православный круг эпохи Мейдзи. К истории жизни Сергея Александровича Маденокова)が載っている。ジェマイティスは、万里小路秀麿の、A. I. サヴェーリエフ宛の一

八通の手紙(ロシア語)を紹介している。それらの手紙は「ロシア国立図書館手稿部(Орден рукописей Российской Национальной библиотеки)」に保管されているという。

アレクサンドル・イワーノヴィチ・サヴェーリエフは、工兵中將(генерал-лейтенант。「將軍」と呼ばれている)で、三〇年以上にわたってペテルブルグの工兵学校で教鞭をとった。(ニコライの親友のフォル・ブイストロフ師は、その工兵学校付きの司祭であった。)サヴェーリエフは『軍事技術関係用語辞典(Алфавитный сборник технических слов, старых и новых, относящихся к военно-инженерному делу)』(一八六九年)を編んだことがある。ペテルブルグで軍事技術を学んでいた日本人留学生たちと知り合ったのは、その辞書編纂の仕事がきっかけであったのかもしれない。

ペテルブルグにいた日本人留学生としては、かつて一八六六年に徳川幕府によって派遣されたいわゆる「遣露留学生」六名がいた。その中の一人、明治四年に日本橋に菓舗資生堂を興した山内作左衛門を主としてロシア留学生を調べた先駆的研究が、内藤遂著『遣露伝習生始末』(昭和一八年。後に『幕末ロシア留学記』と改題)である。山内がペテルブルグにいたのは二年二ヶ月である。その遣露留学生たちのホストはロシアへ帰っていたゴシケーヴィチであったのだが、かれはその役目をほとんど果たしていない。代って世話をみたのが、ペテルブルグにいた橋耕齋である。かれらのうち長くペテルブルグに残ったのは、市川文吉一人であった。

明治になって、一八七〇〜七一年に、ロシアに九名の日本人留学生を送られた。そのなかの一人が西徳二郎であった。万里小路秀麿も一八七一年四月、外務省・文部省から「学生」としてロシアへ渡つたというのだから、私はまだ確認していないが、かれも、その九人の中含まれて

いたのではないか。

一八七四年、国境策定の交渉のために、榎本武揚使節団がペテルブルグへやってきた。そのときペテルブルグには、市川と西と万里小路がいた。(榎本武揚は一八七四年から七八年にかけて駐ロ公使をつとめた。)

ジェマイティスの説明によれば、サヴェーリエフは一八七〇年代のはじめ、市川および西と面識があったらしい。ロシア国立図書館手稿部には、サヴェーリエフの西宛の手紙が保管されているという。

万里小路秀麿は、榎本が任務を果して帰国したあとも、軍事技術の学習のためにペテルブルグに残ったものと思われる。だから最初に引用したニコライ日記一八八〇年二月七日に「軍事地勢学を学んでいる万里小路」と書かれている。市川、西を介して、万里小路もサヴェーリエフと知り合ったのであろう。

保管されている万里小路のサヴェーリエフ宛の手紙のうち三通は、それがまだロシアに在る間にサヴェーリエフに出したものである(①一八八〇年三月二日、②一八八〇年六月一日、③一八八一年九月五日)。万里小路は一八八一年九月に帰国の途についた。約一〇年間ロシアで暮らしたことになる。そしてその後、一八八二年から一九〇一年までの九年間にかれが日本からロシアのサヴェーリエフに送った手紙が、一五通ある。

ニコライは、ペテルブルグでの一八八〇年三月二日の日記に「部屋へもどる途中万里小路に出会った。かれはサヴェーリエフ将軍が一二日にわたしを招いていると言った。Идя домой, встретил Маденокодзи, сказавшего, что генерал Савельев звал меня 12 числа」と書いている。そして一二日の日記には、招かれていたが行かれないので、「わたしに代わって今晚サヴェーリエフに謝ってもらいたいと頼むために、万里小路のところへ行つた」とある。

万里小路の①の手紙は、ニコライの日記と内容が合致しているので、その箇所を訳してみる。

「ニコライ師は、今晚の集まりにはどうしても行けないので、とあなたに謝っておりました。しかし、お宅で次の集まりがあるときには必ず何うと約束しました。ダムチエンデルは今晩お宅へ行きたいと言っていました。わたしも何うようにしたいと思っています。」

この「ダムチエンデル」[Danchender]は、このペテルブルグでのニコライの日記にときどき登場してくるインド人「ラムチエデル」と同一人物と思われる。ニコライの日記一八八〇年一月二十八日には、「ナナ・サイバの甥にあたるインド人……そのインド人はいまペテルブルグに住んでおり、コンスタンチン・コンスタンチーノフ大公殿下と探検旅行をして親しくなった」とも書かれている。

万里小路は日本へ帰ってきてから、一八八二年九月一日に洗礼を受けて正教徒となっている。洗礼を受けたのはニコライだった可能性が高い。受洗のとき、遠くにいる人を代父(洗礼親)として洗礼式に出席できなくても選ぶことができるので、万里小路はペテルブルグにいるサヴェーリエフを代父に選んでいる。

ニコライは「万里小路の内にまじめな宗教的な考えが生まれてくればよいのだが」(日記一八八〇・三・二)と願っていたのだが、願いが実現したらしく、サヴェーリエフ宛の手紙で、万里小路はさかんに宗教が大事であると書いている(第一五通目の手紙)。

また、万里小路の第一〇通目の手紙(一八九二年九月二十六日)には、かれが「体験」した大津事件(一八九一年五月一日)の記述がある。「…皇太子殿下〔後のニコライ二世〕の日本ご訪問の間は、名譽なことにわたしは殿下のお側に侍っております。殿下の日本ご滞在の間は、実にさまざまな仕事があり多忙であつたのですが、しかし口

シア語で話が交わされる場に入り込んでいたので、それはまことにたのしいことでした。大津で凶漢がお命を狙って襲いかかってきたとき、わたしは殿下の前の俥に乗っておりました。あれはまことに恐ろしい事件でありました。しかし皇太子殿下の沈着と勇氣には、まわりにおりました者たちすべてが本当に驚嘆したことでした。おかげで、あのように双方の国家にとってすべては円満に決着したのでした。あの事件については、新聞でご存じでしょうから、くわしく書くことはやめておきます。昨年わたしはアンナ勲章を頂戴いたしました。が、皇太子殿下からはダイヤのご紋章のついたシガレットケースを御手ずから賜りました。まことに美しいお品です。殿下はわたくしに大層おやさしく、わたくしは常にお側に侍っております。

東京にはたいへん美しい正教の教会が出来あがりました。奉神礼は日本語で行なわれています。わたしは週に一度、欠かすことなく教会へ参ります。日本人正教徒の数は年毎に増えていっています。

ロシア公使館にもかなり頻繁に入入りしており、館員全員と仲良く付き合っています。前の公使とは親しくしていました。

尾佐竹猛著・三谷太一郎校注『大津事件』五一頁によれば、ロシア皇太子の一行は大津の「京町通」を、①京都府警部・竹中節、②滋賀県警部・木村武、③滋賀県知事・沖守固、④接伴官、⑤露国皇太子、⑥希臘親王の順で進んでいた。右の手紙からすると、④の「接伴官」が万里小路秀麿であった。

なお京都での接待役は「万里小路正秀（前掲『総覧』によれば秀麿のこと）式部官」である（四五）。また、大津事件にショックを受け「憤死」した島山勇子は、明治二〇年から二二年の頃、「東京に出て万里小路家の婢」となっていた（二五三頁）。

万里小路秀麿のロシア語書簡からは、ロシアへの、とりわけペテルブルグへの、深い愛着が感じられる。一八九六年の夏から秋、万里小路秀麿はロシアを訪ねている。

だが、かれの最初の妻がロシア人女性マリア・バユノワであったかどうかは定かではない。

後年、東京でのニコライの日記では、万里小路秀麿はやや否定的に見られている。

「万里小路が来た。これもまたわたしをして日本を嫌いにさせる人物だ。正教徒でありながら、同時に神道の神主。ロシアで教育を受けたのに、ロシアと正教のことを、プロテスタントである妻にわらく言う人物。かれは正教徒でありながら、その妻との結婚式はプロテスタント式で行なった。正教の結婚式は、どうやら行なわなかったらしい。それでいてみずからは正教徒だと称しているのだ！若いときだったら、わたしはその偽善に我慢できず、この男を追い出さか、殴りつけるかしていたことだろう。かれは正教をばかにしているのだ。アヴェル神父が万里小路に『あなたの信仰は？』と尋ねたのに対して、平然と『正教徒です』と答えているのだ。ああ、正教ゆえに味わうわたしのこの苦痛は、間もなく終わるのだろうか」（日記一八八九・八・三二／九・三）。

その後の日記（一九〇〇・三・一八／三二）には、「セルゲイ・アレクサンドロヴィチ・万里小路来訪。自分の子らしい娘を（正教会の）女学校に入れてほしいという頼み。野村伯爵の娘を妻としていたが（その間に息子がいる）、彼女と離婚し、妾と暮らして、その妾との間に三人の子がいる。別れた妻は別の男と再婚した。わたしは妾を正教徒にしなさいと勧めた」と書かれている。

ついでながら、『東久世通禧日記』（霞会館発行）の明治三年と四年に

はしばしば「万里小路」が登場するが、これは「万里小路通房」と思われる。なお東久世は明治二年から開拓長官として函館在任、かれの日記の明治四年二月二日には「十一時出庁、三時退庁、魯国教師ニコライ来」という記事もある。

ここで、万里小路秀麿が手紙を宛てたアレクサンドル・イワーノヴィチ・サヴェーリエフ（一八一六―一九〇七）とドストエフスキーとの関係についてひとことふれておきたい。

サヴェーリエフが中央工兵学校教官になったのは一八三七年である。一六歳のドストエフスキー（一八二一―一八八一）が中央工兵学校に入学したのはその翌年一八三八年の一月である。それから五年半の間（ドストエフスキーの卒業は一八四三年八月）、サヴェーリエフはドストエフスキーの教官でもあった。そしてドストエフスキーの生涯の最後まで、二人はときどき手紙を交わしたり、会ったりもした。サヴェーリエフは三二年間も、中央工兵学校に勤めた。

サヴェーリエフは有名な地理学協会の会員（член Русского Географического общества）であり、『軍用語百科（Военный энциклопедический лексикон）』（一八四一年）の編纂にも加わり、多くの考古学や歴史関係の論文も発表した。かれの本は、ドストエフスキーの蔵書にあった。

サヴェーリエフは一八〇〇年になって、かつて、わずか五歳年上の将校として「まるで友だちのように」つきあった中央工兵学校時代のドストエフスキーについて、思い出を書き残している。サヴェーリエフによれば、ドストエフスキーは宿題をきちんと提出するまじめな生徒で、たいへん信心深かったという。そして、次のような面があったと伝えている。

「ドストエフスキーは、同級生たちのさまざまにあそびに無関心だった。…精神的資質が少しも変わらぬ若者というものが結構いた。そういう人は若いときも年をとってからも変わらず、同じなのだ。

ドストエフスキーはそういう人間だった。見たところかれは若いときから老人のようだったし、それは人生の熟年時でも同じだった。

若いときもかれは、同年齢の仲間の共通の習慣、くせ、ものの見方というものに合わせるということができなかった。」（A・I・サヴェーリエフ「ドストエフスキーの思い出」。ドリーニン編『同時代人の回想のドストエフスキー』〔Ф. М. Достоевский в воспоминаниях современников〕 под ред. А. Долинина. 1964）

三）西郷従理

ニコライの日記一八八五年（明治一八年）四月二四日／五月六日の日記に、こどもの葬儀の記事がある。

「西郷大臣〔西郷隆盛の弟従道^{つぐみち}〕の息子である、一〇歳と八ヶ月の少年アレクセイ西郷〔従理〕の埋葬式を執り行なった。アレクセイ西郷はワシントン^{ワシントン}のストルーヴェ〔キリル・ワシリエヴィチ・ストルーヴェ前ロシア公使〕の家で亡くなった。」

西郷家とロシア公使の屋敷が隣同士で親しくなり、ストルーヴェ夫妻は幼い従理をわが子のように可愛がり、従理もすっかりなつてしまつたという。それでロシアへ帰るときストルーヴェ夫妻が西郷夫妻に懇願すると、従理も行きがたつたので、西郷夫妻は七歳の長男のロシア行を許した。ストルーヴェは従理をペテルブルグへ連れて行き、貴族学校に入れた。従理は皇弟アレクセイ大公を代父、皇后マリヤ・フォードロヴナを代母として、受洗して正教徒になった。

一八八二年、ストルーヴェは東京からワシントンへ転動した（ニコラ

イの日記、一八八二・一・一五／二七参照)。従理はまたストルーヴェ一家と一緒に、今度はアメリカのワシントンへ行った。しかしそこで腸チフスにかかり一八八四年二月一〇日、一〇歳で亡くなった。その小さな遺骸を当時アメリカにいた大山巖が工夫して日本へ運んできて、ニコライ堂での葬儀となったのである(日露戦争の日本陸軍最高司令官大山巖は西郷隆盛の従兄弟)。

ニコライはじめ多くの正教会聖職者が金襴の祭服に身をつつま、西郷家の人々も参列して、盛大な正教の儀式であった。堂内での式が終わると、参列者数百人が行列し、道の両側に多くの人がびとが見守るなか、警官に先導されて祈禱を唱えつつ青山墓地まで歩いたという。(その後、多磨霊園に移されたのだと想像される。東京西郊の多磨霊園の一角に西郷家の墓があり、従理の碑には「神僕重歴世西郷従理之墓」と刻まれている。)

柴山準行編『大主教ニコライ師事蹟』の「永眠前後」によれば、ニコライは居室の壁に少年アレクセイ西郷の大きな写真をかけていた。「これは故西郷従道侯の長男で、露国全権公使スツルウエの子供と一緒にペテルブルグへ行って教育を受け、そこで洗礼を受けた人である」とニコライは語っていたという。

明治のキリスト教界の重鎮植村正久は、この幼い正教徒アレクセイ西郷の葬儀にふれて、「如何に愛児の信仰を尊重せられたとはいえ、葬儀における信教自由は今日の如くに認められておらず、西郷家のこの態度は、その影響の及ぶ所、決して僅少ではなかった」と批評している(佐波巨『植村正久と其の時代』。明治初期のキリスト教徒の葬儀や埋葬をめぐる「受難」がまだ続いていた時代である(ニコライ『明治の日本ハリストス正教会』の訳注(二一)を参照)。ロシア正教会によるアレクセイ西郷の盛大な葬儀は世間の目をひかないではいかなかった。

それにしても、西郷家とストルーヴェの親しい関係を含め、この全体にどこか不思議な感じが残る。

西郷家と正教会の間にはなんらかのつながりがあったのかもしれない。西郷従道の夫人は自家で蚕を飼い生糸をとっているのだが、その手伝いに毎年前橋の正教徒の織物業者が自分の工場で働く女工を西郷家へ手伝いに派遣していることが、ニコライの日記一八九二年一月一五／二七日に書かれている。

付記——「ニコライの手帳について」

私は一九九七年夏、サンクト・ペテルブルグのロシア国立文書館(RGIA)でニコライ関係の史料調査を行なった。そのとき、ニコライの手帳についても調査した。そして帰国後、『北海道新聞』『朝日新聞』に紹介した。

ニコライの手帳は、それぞれ五つの小さな紙の袋に入れられて、日記三〇冊と一緒に保管されている。所蔵文献目録にも、手帳五冊が上がっている。

私は手帳を袋から出して調査したが、それらはみな手のひらに収まるほど小さいものだった。内容はどれも、ニコライがその時々々の備忘のために用件や地名、個人名などをメモをした控え帳である。

私はこの調査の時に、ニコライ永眠後日本宣教師団長を引き継いだセルギイ・チホミロフが宗務院へ宛てて書いた手紙(「伺い状」)を見出した。これによつて、一九一二年にニコライの日記とこれらの手帳を、東京のニコライ堂からサンクト・ペテルブルグの宗務院へ送ったのは、セルギイであることがわかった。そこには、「ニコライの日記三〇冊と小型手帳(複製)を送った」とあって、手帳の数は記されていない。一九九七年の調査時にも、日記は確かに三〇冊あった。そして、手帳は右に書いたように五冊であった。

私がおのち長く気になっているのは、セルギイが「伺い状」に、「手帳には実に面白いことがらやアフォリズムが書かれていて、たいへん興味深い」と書いていることである。だが、そんな興味深い文章がまとめて書かれている手帳はなかった。セルギイが日本から送ったときには、そういうことを書い

た手帳があったということだろうか。TsGIA (RGIAの前身) に保管されていたときは、他にもっと手帳があり、それが今はRGIAのどこかに眠っているか、或いは館外のどこかにあるということだろうか。

現在RGIAに存在するニコライの小型手帳五冊を、袋に入れ、文献目録に手帳五冊と記載した時点がいつなのか、それを私は知りたい。今回の「国際研究集会」でソコロフ館長はニコライの手帳について報告されたが、こうした点については言及がなかったので、あえてここに書いておく。